

# 【追悼】30分間の扉

## — Sue Dymokeの詩創作教育学研究と日本への影響（日本語版）—

中井 悠加  
(保育教育学科)

キーワード：詩創作指導 イギリス 比較国語教育 追悼 Sue Dymoke

本稿は追悼の目的で日本語または英語を母語とする者両方を読者として想定しているため、同内容の英訳版も同時掲載されています。

### 1. はじめに



図1 Sue Dymoke氏

国際的な詩創作研究を牽引したSue Dymoke (スー・ディモク：以下、Sue) は、詩を愛し詩に愛された研究者だった。彼女はノッティンガム大学を卒業した後、PGCE (postgraduate certificate in education：英国の大学における教員養成コース) で優秀な成績を収め、2000年にノッティンガム大学で博士号を取得した。中等教育学校で教鞭を執った後、レスター大学で教育学の准教授 (Reader) を務めた。2019年にノッティンガムトレント大学の准教授 (Associate Professor) となり、その間病と闘いながらも常に「創造的な思考と読書で自分自身

をいっぱいにしよ」と(2016年9月、Sueからのメールより)し続けた。

2023年6月13日、Sueはその生涯を閉じた。同年4月から彼女との新しい共同研究に着手し、11月に再会する約束を交わした1ヶ月後のことだった。2013年にイギリスの詩創作指導についての研究で博士号を取得してからの私の10年間の研究は、まさにSueと共にあり、彼女の支えによって新しい刺激と挑戦に満ちた日々であった。

本稿では、Sueの理論と実践が日本の詩創作指導研究と実践に与えた影響と、彼女と私との10年間の歩みを記録することを目的とする。

### 2. はじまりの30分

「30分だけなら会えますよ。」2013年2月、初めてSueから届いたメールの文面にはそう書いてあったことをはっきりと記憶している。博士論文「イギリスにおける詩創作指導の理論と実践」を広島大学に提出し、最終審査も終えた数日後のことだった。イギリスについて執筆した自分の博士論文を読んでくださったのは日本の研究者だけだった当時、イギリスの研究者にも読んでいただき評価してもらおうと、突然送ったメールへの返信だった。遠く離れた日本でも同じように詩創作指導に関心を持つ研究者がいることがうれしい、とメールには添えてあった。その2週間後に、レスター大学で「30分の面談」は実現し、それが先述した通り今日までの10年間の自分自身の研究の起点でもあり、日本の学校教育が「Sue Dymokeの詩創作指導実践」と出合う契機にも

なったといえる。

### 3. 「イギリスの研究」としての出会い

#### 1) 評価駆動カリキュラムの中の詩創作

初めて「Sue Dymokeの理論と実践」に出合ったのは、2008年にイギリスの英語教育学術誌である *English in Education* を使用した調査のなかであった。当時大学院博士課程前期1年の私は、まさに研究のようなものを始めたばかりであり、まずはイギリスでどのような詩創作指導研究が展開してきたのかということを探る必要に迫られていた。当時の最新号である2008年から創刊号である1963年まで遡ることで「変動するイギリスの教育状況の中で、詩創作指導はどのように考えられ、イギリスの国語科教育の中でどのように位置づけられて今日に至るのか」(中井, 2012, p.144) を探究していた。

その調査で収集された55本の論文のなかに彼女の論文 (Dymoke, 2001) が入っていた。2008年に初めて考察した後、何度か修正を加えて2012年に発表した論文の中で、私はDymoke (2001) の位置づけについて以下のように記している。

1989年のNC<sup>1)</sup> 導入以降の時代状況に対応する形で詩創作指導を位置づけようとする、つまり新設されたカリキュラムの中での詩創作の位置を模索しようと論じるのが\*Dymoke (2001) である。GCSE<sup>2)</sup> の導入とNCの新設は、そうした教育制度に対応したシステムに沿って評価することが求められるということの意味する。評価方法の確立していない分野については、評価が求められるその他の分野に関する指導をどのように行うかという動向の中で必然的に添え物のように埋もれてしまうことが予想される。それが、1990年代に見る詩創作指導の不在の意味する背景である。当時のNCにおいて「書くこと」の領域では散文に関する評価は充実している一方で、詩創作に関する評価が明確にされていなかった。このような観点から、\*Dymoke (2001) はNCのシステムに沿う形で詩創作指導の評価方法を構築しようと試みているのである。(中井, 2012, p.148、注は引用者

による)

この記述から、当時の筆者はイギリスの強固な試験システムにおける詩創作の位置づけを問い直す研究としてDymoke (2001) を取り上げていたことが分かる。事実Sueのそうした問題意識は、詩創作指導研究を続けるひとつの原動力になっていたに違いない。Sueの研究関心は、もちろん幼少期から詩に親しんできたという彼女自身のバックグラウンドは前提であったが、その問題意識は常に詩創作の学習に関する研究の少なさとカリキュラムにおける詩創作の位置づけの弱さに焦点化されていたように思われる。詩創作指導研究の同僚であるAnthony Wilson氏と共に詩創作の発達モデル研究を続けていたが、その際も「詩創作を学ぶことの社会的文脈があらゆる文献から姿を消している」(Dymoke & Wilson, 2020) ことを指摘していた。つまり、子どもたちの学習や生活、そして彼らが生きる社会のなかに、詩と詩創作を位置づけることを使命としていたのではないかと感じられる。「カリキュラムのなかの詩創作」のあり方を問題視し、その転換をはかろうとしたDymoke (2001) における議論はその一端であったといえよう。

*English in Education* 誌によって筆者が行った調査では、筆者は「Ⅰ. 詩創作指導の隆盛期 (1970年代・1980年代) Ⅱ. 詩創作指導の低迷期 (1990年代) Ⅲ. 詩創作指導の再興期 (2000年代以降)」(中井, 2012, p.147) と時代ごとに区分した。そのなかでDymoke (2001) の論文が発表されたのはⅡとⅢの間、つまり詩創作指導論の危機からの転換地点だったといえる。1985年にGCSEが、1988年にNCが導入されて以来、イギリスは「試験国家」となり、試験に含まれていない詩創作は散文に比べて明らかに不遇であった。Dymoke (2001) のなかで、試験の解答に詩を書き、「不適切な形式」として極めて低い評価を受けた生徒の事例について報告するその文からは彼女の憤りすら感じられた (p.33)。

#### 2) 下書きと評価

その調査から4年経った2012年、私は彼女の理論と実践に再会することとなる。博士課程後期も

残すところあと1年と少しという時点で、最後に設定した研究課題が「詩創作の評価」であった。その時に取り上げて深く考察したのがDymoke (2003) *Drafting and Assessing Poetry*であった。この著作を取り上げて考察する意義として私は、生徒の書いた詩の評価に自信がない教師への支援不足を問題視する彼女の記述を引きながら次のように書いている。

その解決策の出発点として、Dymokeは特に「書く (writing)」ではなく「下書き (drafting)」という概念を強調することによって、詩創作における過程を捉えようとしている。このことは、詩創作指導の中で生じる学びを書く過程の中から捉えようとした時の、実践的な理論としてひとつの指標になると考えられる。(中井, 2013, p.31)

「評価」のあり方を課題として設定したことから「Assessing (評価)」という言葉求めて手にとった本だったが、Sueが提示したこの「下書き」および「評価」は、私自身の詩創作指導への考え方を大きく変えることとなる。アメリカの作文教育者であるDonald Gravesの論を使用した〈概念としての下書き〉によって、まだ詩の形にならないメモの状態や書いている途中の「創作過程」すべてが学びの対象となる。こうした「下書き」は、詩創作への抵抗感を減じる魔法の言葉のようにも思える。またそれを教室において実現する (Dymoke, 2003, p.34) ための〈実体としての下書き〉によって、ノートに残す内容、子どもたちと共有する内容がはっきりと示される。それはつまり教室において子どもたちに何を伝えればよいのかという具体的な指導内容を明確にする。Dymoke (2003) では、詩人たちの完成された詩だけではなく、彼らが詩を書くときに残した「下書き」を分析対象とし、どのように執筆中の思考を読み取っていくのかということも教材の一つとして紹介していた。次の言葉は、Sueがワークショップにおいて常に紹介する詩人ジャッキー・ケイの言葉である。

[下書きは：引用者補] 学校の子どもたちにとってあまり知られていないが、作家になりたいと思うなら学ばなければならないものであ

り、また何度も書き直さなければならない。まるでベッカムが実際にフリーキックをする前に何時間も特訓するのと同じである。(Dymoke, 2003, p.66より、インタビュー内の発言)

詩人のこうした言葉は、先にも「魔法の言葉」とも表現したのと同じく、詩や詩人がもつある種の「神秘性」を取り除いてくれるものである。私たちは、日本の学校で詩を書く時にそのような助言を受けたことがあるだろうか。

また、Sueが示した「評価」の概念は、もちろん試験駆動のカリキュラムにおける評価システムへの参入可能性を探るための評価項目 (Dymoke, 2003; 中井, 2013) も開発された一方で、単に作品を評価するだけでなく子どもたちの創作の文脈に位置づける役割を果たすことが重要視されていた。書くことは、極めて個人的な作業である。そのように子どもたち個々人の内面に生じる思考過程を、「共有」という形で評価することによって個人間の思考過程へと巻き込み、詩を書く共同体としての教室がもつ文脈にそれぞれの「下書き」をつなげていく意味での「評価」であった。彼女の意識は一貫するものであったといえる。

この「下書き」「評価」について私は2012年5月に全国大学国語教育学会で発表し、そしてそれは2013年3月にSue Dymokeの論を初めて日本に紹介する論文「S. Dymokeの詩創作指導の理論と実践—下書きと評価を中心に—」として同学会の機関誌である『国語科教育』に掲載された。査読委員から受け取った査読コメントに次のように示されていた。

S.Dymokeの理論と方法を紹介・検討することによって、多くの教師が実践できるような指導方法・評価方法を解明・開発しようとする意欲的な研究である。類似の研究が少ないという点で独自性もある。日本の詩創作指導に大きく寄与するものと評価できる。

このコメントは、彼女の理論と実践がいかに日本の国語教育研究にとって新しい風を吹き込む可能性を持っていたかを表している。

#### 4. 「輸入」から「共同」への試行錯誤

### 1) 2013年から2017年へ

時を同じくして、この10年間のすべての始まりともいえる冒頭の「30分間の面談」は実現した。当時広島大学が「卓越した大学院拠点形成支援補助金」の交付を受け、その助成によって私は自分の「研究対象」であるSueに直接対面し、その研究についてコメントを受けることができたのである。しかし、その時に「あなたの考察は間違っていない」と言っていただいたことは安心すると共にショックを受ける体験でもあった。上記の査読コメントにもあったように、当時は自分自身の研究の新規性と独自性を信じていたし、日本ではそのように評価いただいていたことも少なからず事実であった。しかしそれはSue、つまりイギリスの研究者にとっては新しいものではなかった。自分の視野の狭さを突然実感した瞬間でもあった。

しかしSueは極めて好意的にこの日本人の小さな研究と突然の訪問を歓迎してくださり、日本とイギリスとをつなぐ詩創作指導研究と一緒にできる未来を描いてくださった。ワークショップを使った体験型の研究交流を共に進めることが提案されたのもこのときだった。しかし、それが実現したのは2017

年12月、広島大学において一週間開催した「詩と物語創作のためのワークショップ・セミナー：21世紀の詩教育学構築をめざした日英比較研究」である。実に5年弱の年月が経過していた。

思い返せばもどかしい気持ちと非力な自分への悔しさにおそわれるものの、日本における比較国語教育の新しい方法に向けた歩みを記録として残すことは少なからず何かの意義があるのではないかと考える。そこで、2017年のワークショップ開催までのやり取りを一つずつ振り返ってみたい(表1)。

このように、様々な試みと失敗の蓄積の末に開催されたワークショップであった。5年弱の年月がかかったとはいえ「体験型の研究交流」が実現したのはSueの理解の深さと日本へのあたたかい関心、詩への強い愛情によるものだったと言えよう。

### 2) 詩と物語創作の一週間

2017年12月12日から14日までの3日間にわたって開催された「詩と物語創作のためのワークショップ・セミナー」の詳細は中井・Dymoke (2019) に記録している。この時のセミナーにおいて初めて「創造的リスク・テイキング (creative risk taking)」という概念と日本が出合うこととなる。SF映画である『スター・トレック』のキャプテン・ジェームス・T・カークの「未知の世界を探索し…新しい生命と文明を求め、人類未踏の宇宙に勇敢に航海した」という台詞を引きながら、詩が「若い書き手に言語や考えにおけるリスクを冒す場所と余地を与えてくれる」と紹介されたのが「創造的リスク・テイキング」であった。中井・Dymoke (2019)、中井 (2020)、およびDymoke & Nakai (2021) においてもその概念を探究し続け、Giddens (1999) において示された「risk」の語源である「未知の水域への航海」(p.21) を引きながら「好ましい事象と好ましくない事象のどちらが発生するのか、何かが発生するののかも分からない不確実性を乗り越えて新たな創造に挑む」(中井 & Dymoke, 2019) ことと定義した。この概念は、先述した「下書き」とも通じる、むしろ共に成立するものであると考えられる。

表1 ワークショップ開催までの歩み

年月	交流内容
2013.3	レスター大学で30分間の議論
2014.4	「実証研究」を期待してイギリスの学校訪問を試みるも失敗
2014.6	NATE (National Association of Teaching English) @ Bristolで再会
2014.7	DAIWA Foundationへの研究助成応募検討を開始
2015.2	レスター大学訪問、授業見学
2015.6	DAIWA Foundation不採択
2015.7	広島大学若手研究支援 応募
2015.9	広島大学若手研究支援 不採択 (「国際研究」のあり方をはき違えている、とコメント)
2015.10	科研費 (若手研究B) 応募
2016.4	科研費 (若手研究B) 採択「国際化時代におけるリテラシー教育モデル構築のための基礎的研究」
2016.5	ノッティンガム訪問、BROMLEY HOUSE LIBRARY訪問、パートナーである作家のDavid Belbin氏と対面。日本のワークショップが2017年4月に決定
2017.3	Sueの体調を考慮してワークショップ延期
2017.7	Shared English@New CastleでSueとAnthony Wilsonの「詩創作の発達」に関する研究発表を聴く
2017.9	ワークショップの計画を再開
2017.12	「詩と物語創作のためのワークショップ・セミナー」開催@広島大学

この3日間のセミナーの後には、広島大学附属福山中・高等学校へ行ったり、原爆資料館を訪問したり宮島へ出向いたりするなど、Sueと作家であり彼女のパートナーであるDavidが広島と強くつながりを持つ機会を設けた。福山附属中・高等学校では、二人が詩や小説を朗読したり詩の授業を参観したりした。なかでも彼女は小倉百人一首の授業に関心を強くもち、その時のことは彼女が最期まで書き続けていたブログに「カルタ：熱狂的な詩のゲーム」として紹介された<sup>3)</sup>。

2023年のG7サミットにおいて岸田首相が各国首脳を原爆資料館に招いたことは記憶に新しいが、そのニュース映像を眺めながら思い出していたのはSueとDavidと3人で原爆資料館を訪れた時のことだった。静かに資料館をまわり終え資料館を出たとき、Sueはおもむろに私を抱きしめ「つらかったね」と声をかけてくれた。その後、Sueは次の詩を書いた(図2)。この詩のタイトルである「What They Left Behind (彼らが残したもの)」は、2018年に同タイトルの詩集に収録されて発表された。

広島を後にしたSueとDavidの旅は、神戸・京都・金沢と続いた。その新幹線の中で味わった愛媛のみかん「紅まどんな」や京都の龍安寺でのことを残した「Oranges」「At Ryoanji Temple」も、先の*What They Left Behind*に収録されている。それらの詩から、Sueの感じた日本の空気が、胸の高鳴りが、一つひとつ言葉になってあふれ出ていることを感じる事ができた。詩はこのようにして、言葉で時間と空間をつないでくれると実感したものである。まさに彼女の人生は、詩と言葉とともにあったことがよく分かる。

私にとって、SueとDavidと過ごした広島での一週間はまさに夢のような時間だった。日中に創作のワークショップを経験して夕方から暖炉(をスクリーンに映した動画)の炎の前での詩の朗読会に浸る。そして詩や創作、教育を愛する仲間たちとのたくさんのお話。その合間に、SueやDavidのワークショップやセミナー資料の翻訳、附属学校における詩の授業の指導案の英訳と、毎日寝る間を惜しんで翻訳を繰り返していたことも、体力は削られたかも

しれないが貴重な喜びであった。疲労も忘れて詩について、広島について、教育について語り続けた毎日は、これまでの研究活動の報酬だとすら思っていた。

思えば、この一週間を企画するにあたって頭にあったのは2011年に初めて訪れたイギリスにおいて経験したArvon Foundationによる1週間泊まり込みの詩創作ワークショップの経験(中井, 2016)であった。私はその経験を日本で再現するという夢の実現を目指していた。Arvonがイギリスにおいて多くの創作者や教育者に強い影響力を持っていることはすでに博士論文の研究の中で知っていたが、この当時はSue自身もその一人であったことをまだよく分かっていなかった。2023年7月17日に*The Guardian*紙に掲載されたSueの追悼文には、「1986年、イアン・マクミランがチューターを務めるArvon Foundationの創作講座に参加してから、

#### 彼らが残したもの

弁当箱  
腕時計  
義眼

名もなき花瓶  
印鑑  
国旗

定期券  
銀行の通帳  
子ども用のワンピース

木製のサンダル  
ベルトのバックル  
ズボン

中学校の制服  
三輪車  
娘の髪の毛

砂田登さんの水筒  
谷本太さんの飯ごう  
その飯ごう袋

秋信仙太郎の双眼鏡  
比治山での  
花見に使おうと思っていた

Sue Dymoke  
*What they left behind* (Shoestring Press, 2018年)

図2 Sueが残した詩「彼らが残したもの」

彼女の詩創作に火がついたのである」と綴られている<sup>4)</sup>。それを読んで初めて、私は彼女が参加した25年後に、後を追うように同じArvonの講座に参加したのだということを知ったのである。無意識のうちに彼女のことを追いかけていたことを知り、嬉しい気持ちと共に、Arvonでの体験についてもっと語り合いたかった、という悔しさも感じた。

Sueはこの一週間について、ブログの中で次のように記してくれた<sup>5)</sup>。同じ未来を共に展望する仲間を得たことを実感できる記述であった。

日本滞在中、私は詩の書き方や指導方法についてのワークショップを行い、詩の朗読と「詩を見つける、書く、研究する」と題した研究セミナーも行った。熱心な大学院生、中学校教師、教師教育者、研究者、詩人たちに出会った。彼らは皆、新しいアプローチを試したり、下書きを共有したり、詩について語ったりすることに熱心だった。彼らと話し共に活動する中で、私は日本のカリキュラムにおける詩の位置づけや、日本の詩人について多くを学んだ。この旅は多くの素晴らしい詩的体験で満たされた。この旅が、中井悠加さんと彼女の同僚たちとの新しい詩の研究の始まりになることを願っている。

Sueが書き残したように、これは最終的な「夢の実現」ではなく、それに向けた第一歩、「研究の始まり」だった。このワークショップで使用した詩創作アイデアを、日本の教師も使えるようにまとめ、その日本語訳を彼女のblogに掲載している<sup>6)</sup>。

### 3) 初めての共著

共に見つめる未来へのまぎれもない「第一歩」であるワークショップのインパクトを、私たちは実践記録として残すべく初めての共同執筆を開始した。それが先にも述べた中井 & Dymoke (2019) であり、Sueにとっての「First Japanese Publication」であった。そして、日本語ではあるが私自身の初めての国際共著でもあったのである。

執筆に際して、ワークショップ参加者へのアンケート結果の英訳、分析、分析結果の和訳、考察の英訳と和訳といったように、延々と日英を往復する

翻訳を繰り返す作業は、とんでもない労力を要した。それと同時に、それは新しく刺激的な時間でもあった。そこで目指したのは、「日英共同で探究可能な概念の抽出」であり、次の4点を結論として導き出していた(中井 & Dymoke, 2019, pp.107-108)。

- ① 自分の言葉表現に自覚的になること
- ② 発想の訓練によるアイディアの言語化
- ③ 当事者意識・自立性の高まり
- ④ 条件下での自由の行使による創造的リスク・テイキング

これらの観点を軸にしながら、詩創作学習の開発をしていくことの重要性を論じたことに本論文は成果を有していたと考える。ヨーロッパ各国の言語と違い、日本語は英語とそのルーツも文字体系も音韻体系もまったく異なる言語である。その二言語間で共通する柱を見いだすことができれば、「翻訳」さえあればどの国でも実現可能な詩創作学習を開発できるのではないかという考えが確信に変わりつつある時期であった。

### 4) National Poetry Dayの夜

公私にわたり交流が続くなか、私が島根県立大学に職を移し、所属する全国大学国語教育学会の研究部門委員を3年間務めることになったのが、次の契機となった。学会が主催する公開講座として、再び共同で詩創作ワークショップを行う企画が2019年に承認されたのである。それは2021年の5月に開催が予定された札幌大会で行われることが決定した。

その頃私は、先に示した4観点のうち「創造的リスク・テイキング」の所在を求めて、再びレスターとノッティンガムを訪れ、Sueのワークショップに参加したり中学校で詩の授業を観察したり、研究協力者であるKayleigh Miller氏にインタビューを行ったりしていた。そうすることで、次の研究課題を設定する突破口となる何かを探していたのである。

来る二回目のワークショップの打ち合わせを行うためレスターとノッティンガムを訪れた2019年10月には、SueとDavidの自宅に招かれ、またNational Poetry Dayのイベントをこの身で体験することができた。National Poetry Dayを初めて知っ

たのは、2008年に行った*English in Education*誌の調査であった。2007年のIssue 3に組まれた詩教育特集号に寄せられた「編集記 (Editorial)」において、彼女はこのような詩を大切に作る動向に明るい未来を展望していた。National Poetry Dayは想像していた以上に市民に大切にされ、授業でも詩を祝うように取り入れられ、街は詩であふれていた。

一日中詩にどっぷり浸かり、詩と、詩への愛情と、Sueが愛した庭のたくさんの花や木々に包まれながらSueとDavidと笑い語り合ったノッティンガムの夜も、もう一つ大切な宝物のような時間である。あのとき客間で見せてくれた詩集*SPACED OUT*に収録されたSueの詩「Perseids」(Dymoke, 2019, p.61)は、流星群の夜空を思わせる美しい図形詩だった。ペルセウス座流星群が実際に見られるのは7月から8月の真夏であるが、秋も深まるその夜、眠りにつくときに私のまぶたの裏では、Sueの詩が描く星々が流れていた。

それは、Sueと直接会って声を交わした最後の夜だった。

### 5) オンラインワークショップの実施

ノッティンガムを訪れた数ヶ月後、2019年末あたりから世界中はCOVID-19のパンデミックに見舞われた。国外どころか県外へも出ることが許されず、イギリスではロックダウンにより自宅からさえ出ることが難しくなってしまった。2020年5月に予定されていた全国大学国語教育学会の島根大会自体も先の見えない状態で延期となり、私たちの世界はすっかり様変わりしてしまった。当然、札幌で予定されていた共同ワークショップも一度白紙になりかけた。

しかし、当時の研究部門委員のメンバーの知恵と好奇心は、研究大会のオンライン実施の模索へと結びついた。Sueを札幌に招聘することは叶わなかったものの、Zoom MeetingとYouTube Live配信を駆使してオンラインワークショップ「言葉のティンカリングとことばあそび：詩創作の下書き、共有、評価をどう促すか？」が実現したのである。

それが2021年5月のことだった。その詳細は

Dymoke & Nakai (2022)に残している。パンデミック前の企画当初、このワークショップは北海道近辺の学校関係者と学会参加者のみを対象に20人ほどの規模を見込んでいた。しかし、オンライン実施になったことによって私たちの2回目のワークショップはYouTube Live視聴者およびアーカイブ視聴者を含めるとスイス、シンガポール、イギリス、日本という4カ国から700人以上の人々に届けられることになったのである。

このときワークショップで取り上げたアイデアは、ひとつの単語（「旅」）から思い浮かぶ言葉を書き続けるウォーミングアップである「フリーライティング」、初めて訪れる場所への旅の思い出を絵と文字で語り合う「マッピングテクニック」、さまざまな孤独に置かれた身近な「モノ」に声を与える「おしゃべりなモノ」、そして既存のテキストから言葉を抜き出して並び替え詩をつくる「ファウンドポエトリー」、そして参加者同士の「共有」＝「評価」であった。時間内にとにかく自分の頭から絞り出す活動、思い出について語り合う中で言葉をあふれさせる活動、モノにストーリーを与えて言葉をつむぐ活動、そして既存のテキストといったように、これらの手法に共通する大きな特徴として、「言葉の銀行をつくること」が挙げられる。真っ白な紙を渡されて、「さあ旅について詩を書きましょう」と言われても、きっと慣れていない書き手は（子どもでも大人でも）戸惑い、手を止めて頭を抱えてしまう。使う言葉と、その言葉の選択と配置を同時に考えなければならない。つまり何を書くのか、どう書くのかを一度に求められるわけである。しかし、フリーライティングとマッピングテクニックによって、配置や選択を気にすることなく記憶と連想、思い出を使った「使えそうな言葉」のストックを自分で増やすことができる。ワークショップ参加者は、過去の思い出を楽しみながら語りつつ、そこであふれ出る言葉を次々にためていった。その活動自体が楽しく、頭をあたためてくれる時間になったことは間違いない。

これらの手法については、私自身が勤務校である島根県立大学の教員志望学生向けに行うメニューに

もなっている。次の記述は、2023年の受講生の一人が残した詩創作ワークショップの感想である。長くなるが、本人の許可を得てここに引用したい。

今まで小学校・中学校と国語の授業で詩を書くことがあったけどそういう授業はとても嫌いでした。突然、お題を出され、制限時間内に詩を書かされ、発表させられたり、掲示されるのが苦痛で仕方なかったです。でもこの授業は今までとは全く違って、ウォーミングアップから始まり、いろいろなタイプの詩を自由に書き、どんどん書きたいことが浮かんできて手が止まらなくなる感じがとても楽しかったです。どれもその人に合うエクササイズかはわからないため何個も試す、一つ方法が全員に合う保証はないため試行錯誤を繰り返す。これは授業を行う身として、とても重要なことだと気づかされました。一つの概念に囚われないことは人として生きていくうえで大切だと思いました。また、この授業で一番心に残っているのは「下書きのままでもいいんだよ」という中井先生の言葉です。この言葉が私の詩創作への意欲を倍増させてくれました。

ここで学生が残した「中井先生の言葉」というのは、当然私自身の口からではあるが、本当はまぎれもなく「Sue Dymokeの言葉」である。彼女の実践と、そこで残してきた多くの言葉は、このようにして日本においても学校の教師を志す学生の詩創作への抵抗を減らし、そしてその経験はきっと将来の子どもたちと共有されていくことだろう。何年かかることかも分からない途方もない先のことになるかもしれない。けれども、日本のあらゆる教室で、教師と児童生徒が、詩を書く授業を楽しみに待つ毎日を送るような未来を期待することは許されるだろう。

## 6) 新しい研究：デジタルスペース構築

2021年の共同ワークショップがオンライン開催であったことは、Sueとのもう一つ次の段階へと進む新しい研究を開始する契機となった。それが、Found Poetry Webアプリケーション<sup>7)</sup>の開発である。

ファウンド・ポエトリー (Found Poetry) とは、既存のテキストから言葉を抜き出して詩をつくる表現手法である。言葉のコラージュのように、迷惑メールやWebニュース、広告、レシピ、手紙など、広範なジャンルのオリジナルテキストを使い、好きなように言葉を選び、組み合わせることで新しく詩を生み出すことができる (Dymoke, 2016; 中井 & Dymoke, 2019; Dymoke & Nakai, 2022)。真っ白な紙の上で詩を「作る」のではなく、それらのテキストから言葉を拾って並び替えたり少し形を変えたりすることで、言葉の音や形、意味に注目しながら詩を「見つける」(=再構築する) ことが大きな特徴である。

このアイデアを最初に日本で紹介したのは2017年の広島におけるワークショップだった。その時は*FTWeekend*誌に掲載された芸術展示会を紹介する記事 (Gerlins, 2017) を印刷し、そのコピーに直接マーカーなどで線を引いて行った。しかし、オンラインではオリジナルテキストを配信し手元にそれぞれがその場ですぐに用意することは困難である。そこで2021年のワークショップがオンライン開催になった時点で外すことになったアイデアであった。

しかし、そのオリジナルテキストが「言葉の銀行」として高い効果を持ち、それが書き手の抵抗感の軽減と創作への自信の向上につながる、詩創作の「入り口」として最適であることも事実としてあったのは共通して認識していた。また、Sueは以前よりファウンド・ポエトリーとICTとの相性の良さを指摘しており (Dymoke, 2003; 2016) むしろデジタル環境で使うことができるようになることは、現代の学校における詩創作活動の可能性を拡大するのではないかという結論に至ったのである。

その着想は、勤務校の島根県立大学が位置する島根県松江市のIT企業であるblueOmegaの協力を得ることで、Webアプリケーションとして開発された。そのパイロットバージョン (FPW1.2) は2021年のオンラインワークショップにおいて初めて紹介され、現在のバージョン (FPW 3.1) まで改良が続けられている。(表2)



表2 Webアプリの変遷

日付	バージョン	更新内容
2021/4/9	FPW Dev.	プロトタイプ完成
2021/4/13		ドメイン取得
2021/5/10	FPW 1.0	サーバー移行完了・初期バージョン完成
2021/5/20	FPW 1.1	Found Poetryについてのページ更新
2021/5/26	FPW 1.2	テキストの削除機能追加
2021/5/29		パイロットバージョン公開
2021/6/15	FPW 2.0	システム再構築、URL変更(https)
2021/7/13	FPW 2.1	修正バージョン公開(空白、インデント)
2021/9/2	FPW 2.2	ハイライトの色修正
2021/9/6	FPW 2.3	テキストの中央揃えを左揃えに修正
2021/11/26	FPW 2.4	アカウント登録方法修正
2022/1/7	FPW 3.0	スマートフォン・タブレット対応公開、コメント機能追加
2023/7/1	FPW 3.1	CSV登録機能、修正バージョン公開

このWebアプリを、日英をつなぐデジタル詩創作スペース構築の「ポータル」(Gee, 2004)として確立させるため、ワークショップとして試行し、それに基づく改良を続けてきた。その開発経緯について再び論文を共同で執筆しつつ、2023年4月から新しい研究課題「持続可能な学び合いをサポートする詩創作デジタルスペースの構築」(日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C))として再出発した。

執筆中の論文は、これまでにいくつかの学術誌に投稿し、その都度リジェクトを受けて書き直しを重ねている最中である。私自身の視野の狭さによる文献カバーの不十分さと英語力の低さは、ここでも足を引っ張る原因となった。なかなか成果に結びつかないなか、デジタル教育を研究する心理学者である、ノッティンガムトレント大学のClare Wood教授にも協力を得ながらさらに改善を続けてきた。

それと並行して世の中はCOVID-19による行動制限が緩められ、国内の出張も増えてきた。新しい資金を得て、新たな研究計画を立てるために私たちは2023年の11月にノッティンガムで再会する約束をした。その新しい未来に期待を膨らませる春だった。

## 5. さいごの30分

「30分だけなら話せるよ。」そのメールを受け取ったのは2023年の5月4日だった。初めてSueから受け取ったあのメールからちょうど10年が経

過していた。そこに示された文面はあ那时的のメールと重なっていた。私たちはZoomで今後の研究計画のことを議論しようと約束していたが、Sueの体調が優れないために時間を短縮しよう、という提案だった。その言葉を見て、私はそのミーティングを中止してメールだけで最低限のことを決めようと提案し、彼女もそれを了承した。もちろんそれは正しい判断だったと今でも思っているが、それは彼女との「さいごの30分」の時間をキャンセルすることを意味していた。

メールで11月に再会する日程と泊まるホテルを具体的に決めた後、Sueからの次のメールは、私に届いた彼女の最後の言葉だった。「良い計画ね！また会えるのが今から楽しみ。」チケットを取ったらまた返そうと思い、メールアプリを閉じた。そのことをずっと悔やむことになる。

それから1ヶ月と少しが経った2023年6月13日、大学での授業を終えてふとスマートフォンに目をやると、Davidから「Sue」というタイトルのメールが届いていた。そこには、Sueが最後の治療を終えて帰宅したこと、美しい太陽の光のもとで二人が市民パートナーシップを結んだこと、そして彼女はすでに意識がないということが綴られていた。

思いもしない内容だった。驚きのあまり目の前が真っ白になった。持っていた授業資料やペンをすべて床に落としてしまったまま読んでいたことに気づき、それらを拾い上げてすぐに研究室に戻った。パソコンを開き、メールの返信を打ち始めた。ふるえる手をおさえ、止まらない涙を拭いながら文面を書いているのは消し、書いては消した。どんなにこの10年間でSueのおかげで充実し刺激的だったかということ、まだこれから一緒にやりたい仕事がたくさんあること、Sueから学びたいことがまだまだ尽きないこと、感謝してもきれいなこと、そして、会うのが楽しみだと言ったSueに返信をしないままになっているのを悔やんでいることを、つたない英語で綴り、送信ボタンを押した。そのメールがDavidの元に届いたのは、Sueが息を引き取った30分後だった。「この美しいメールを読んで聞かせたかった」と彼はメールに記してくれた。

## 6. おわりに

2013年に初めて研究交流・共同研究の企画を開始して実現までに5年弱を要したのはすでに述べた通りである。その後計画が遅々として進まなかったのは、私の英語力の低さと国際研究の場への理解の浅さゆえであった。それはまだ、当時の自分にとって英語圏の研究界がどこか自分とは直接関わりのないフィクションのように思える感覚が拭えていないこと、つまり海外の研究者に対する相手意識の低さを意味していたのである。それは「輸入型研究」に終始していた所以である。

しかしSueは、英語もろくに話せず、狭い視野のなかでまごつく一人の日本人をここまで大切に思い、常にやさしく導いてくださった。それを可能にした彼女の詩教育研究への使命と限りなく深い愛情、そして世界のあらゆるものへの強い好奇心は、彼女が関わってきたすべての人々に自ずと伝わってきたのだろう、とこの身をもって感じている。

2017年のワークショップ・セミナーを報告した中井・Dymoke (2019) は、「単なる国際比較や海外の先端的な指導法の輸入に止まらず、国際交流を踏まえて新たな指導法や実践を開発していく臨床研究」(勝田, 2022, p.107) を目指そうとした試みとして評された。構想から発表まで6年以上を要したが、その6年間は「輸入研究」から「共同研究」への移行の苦しみと喜びが詰まった年月だったといえよう。

Sueは意識を失う前に、次のように最期の言葉を残したとDavidはメールのなかで教えてくれた。

自分の人生を詩で締めくくれることがとても  
幸せ。幸せです。

彼女の人生は、その幕を閉じるときだけでなく、常に詩と創造であふれていた。冒頭でも触れたように、2016年に病と戦う中で彼女は「創造的な思考と読書で自分自身をいっぱいにしよう」と続けている」とメールのなかで伝えてくれた。彼女の詩創作教育学研究と実践は、詩に携わる人生を祝い喜ぶ心

そのものを表していた。そしてそれが教師へ、生徒へと自然と伝わっていく形で、イギリスをはじめとした様々な国に影響を与え続けてきた。日本もその一つであったと言うことは許されるだろう。

私自身の使命は、研究者として、そして教師教育者として、Sueから受け取った精神を継承していくことである。どちらの立場としてもまだまだやっと一步を踏み出さんとする途上にあり、この10年間でどこまで十分に受け継ぐことができたかと言われると正直なところ自信はない。しかし、これから残された時間を使い、Sueが期待し描いた世界を描き続けること、そしてその先の新しい世界へと挑戦し続けることを、ここに記して強く誓う。

## 注

- 1) National Curriculum: イギリスにおける国家カリキュラム
- 2) General Certificate of Secondary Education: 義務教育修了時における中等教育修了一般資格試験
- 3) <https://suedymokepoetry.com/2018/01/14/karuta-a-frenetic-poetry-game/>
- 4) <https://www.theguardian.com/books/2023/jul/17/sue-dymoke-obituary>.
- 5) 注1に同じ
- 6) <https://suedymokepoetry.com/poetry-writing-resources-for-japanese-teachers/>
- 7) <https://www.foundpoetry.net>

## 附記

本研究はJSPS科研費23K02398の助成を受けたものです。

## 引用文献

- Almond, D. (2023, July 17). *Sue Dymoke Obituary*. The Guardian. <https://www.theguardian.com/books/2023/jul/17/sue-dymoke-obituary>
- Dymoke, S. (2001). Taking poetry off its pedestal: The place of poetry - writing in an assessment-driven curriculum. *English in Education*, 35

- (3), 32-41.
- Dymoke, S. (2003). *Drafting and assessing poetry*. SAGE Publications Ltd.
- Dymoke, S. (2016). Integrating Poetry-focused Digital Technology within a Literacy Teacher Education Course. In Kosnik, C., White, S., Beck, C., Marshall, B., Goodwin, A.L., & Murray, J., (eds.) *Building Bridges*, The Netherlands: Sense Publications, 59-75.
- Dymoke, S. (2018a). *Karuta: a frenetic poetry game*. Sue Dymoke Poetry.  
<https://suedymokepoetry.com/2018/01/14/karuta-a-frenetic-poetry-game/>
- Dymoke, S. (2018b). *What They Left Behind*, Shoestring Press.
- Dymoke, S. (2018c). *Poetry writing resources for Japanese Teachers*. Sue Dymoke Poetry.  
<https://suedymokepoetry.com/poetry-writing-resources-for-japanese-teachers/>
- Dymoke, S. (2019). Perseus, In Brian, M & Carter, J. (2019) *SPACED OUT*, Bloomsbury.
- Dymoke, S. & Nakai, Y. (2022). Tinkering with words, playing with language: how do you stimulate the drafting, the sharing, the assessment of poetry?, 『全国大学国語教育学会・公開講座ブックレット14詩を書くことは教えられるのか』, 45-59.
- Dymoke, S. & Wilson, A. (2020). Towards a Model of Poetry Writing Development as a Socially Contextualised Process, *Journal of Writing Research*, 9 (2), 127-150.
- Gee, J. (2004). *Situated language and learning: A critique of traditional schooling*. London: Routledge.
- Gerlis, M. (2017). The ghost in the art world machine. *FTWeekend*, 9.
- Giddens, A. (1999). *Runaway World*. London: Profile Books.
- 勝田光 (2022). 「国語科における読むことの学習指導の科学的探究」『読書科学』 63 (2), 101-110.
- 中井悠加 (2012). 「イギリスの国語教育における詩創作指導論の展開」『広島大学大学院教育学研究紀要第2部』 61, 143-152.
- 中井悠加 (2013). 「S.Dymoke の詩創作指導の理論と方法」『国語科教育』 73, 31-38.
- 中井悠加 (2016). 「ワークショップ型詩創作指導による学びの形成」『学校教育実践学研究』 22, 65-77.
- 中井悠加 (2019). 「詩を創作するということ」白坂洋一・香月正登編『「子どもの論理」で創る国語の授業—書くこと—』明治図書、40-49.
- 中井悠加 (2022). 「国語科における「詩創作指導」の可能性とは」『教育科学国語教育』 2022年2月号、明治図書、24-27.
- 中井悠加 & Dymoke, S. (2019). 「国際化時代における詩創作教育学に関する日英共同研究」『読書科学』 61 (2), 97-109.
- (受稿 2023年9月29日, 受理 2023年11月15日)